

令和元年6月19日現在

機関番号：32660

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2016～2018

課題番号：16H07227

研究課題名（和文）16世紀スコットランドにおける自国語文化の形成過程を探る

研究課題名（英文）The Development of Vernacular Culture in Sixteenth-century Scotland

研究代表者

張替 涼子（Harikae, Ryoko）

東京理科大学・理学部第一部教養学科・講師

研究者番号：70778175

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：ヘクター・ボエスにより1526年にラテン語で執筆された『スコットランド国民の歴史』を2人の人物が別々にスコットランド英語（散文）に翻訳した。1人は国王に依頼されたのだが、もう1人はおそらく個人的な目的で作成したらしい。後者の翻訳作品の全容を解明するべく、本文考察および現存する写本の調査を行った。

写本の調査からは、この翻訳の制作時期や同時代の所有者などが明らかとなり、また、本文の考察からは、翻訳者のヒューマニズム的な王権に対する考え方が浮かび上がってきた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

スコットランドにおいて16世紀前半は自国語文化形成の黎明期である。ラテン語で執筆された自国の歴史書を自国語に翻訳することは、より多くの国民に自国の歴史を広め、統一した自国理解、国家意識を浸透させることを意味する。ジョン・ベレンデンの翻訳はこの一例である。しかし、The Mar Lodge Translatorの翻訳は個人、もしくは極めて小さな範囲でのプロジェクトである。誰がどのような目的でこのプロジェクトを推進したのか、また歴史書の翻訳作品にどのような有用性を見出していたのかを明らかにすることはベレンデンの作品とは異なった角度から自国語文化形成の様相を明らかにするうえで極めて意義深い。

研究成果の概要（英文）：Within a few years of the publication of Hector Boece's *Scotorum Historia* (Paris, 1527), two independent Scots translations were made. The so-called Mar Lodge Translation is one of them and it has received but scant scholarly attention. I have closely examined the text of this translation in order to reveal hitherto unknown political, historiographical, or social attitude of this translator. In addition to this, I examined the only extant manuscript of this translation to find out when it was made and to whom it belonged in the sixteenth century.

研究分野：中世及び近世スコットランド文学

キーワード：スコットランド 翻訳 自国語 ヒューマニズム 王権 国会意識

様式 C - 19、F - 19 - 1、Z - 19、CK - 19 (共通)

1. 研究開始当初の背景

スコットランドにおいて、16世紀は自国語文化の黎明期であった。それまで国家の本格的な歴史書はラテン語で執筆されていたが、1531年頃国王の命令によりジョン・ベレンデン(John Bellenden)がヘクター・ボエス(Hector Boece)によるラテン語の歴史書 *The Scotorum Historia* (1526)をスコットランド英語に翻訳した。これにより、この歴史書はスコットランド国民に広く普及し、その結果国民に統一された国家意識が形成されることとなった。一方、ベレンデンと同時期に同じボエスの歴史書を翻訳した *The Mar Lodge Translator* とその翻訳書 *The Mar Lodge Translation* についてはその存在も長く世に知られることがなく、学術的な研究もなされてこなかった。この理由の一つとして、この作品が個人的なプロジェクトであったこと、そのために印刷されることもなく、ただ一つの写本のみで現存することが挙げられる。また、一見するとジョン・ベレンデンの翻訳に比べて *The Mar Lodge Translator* の翻訳はラテン語の原典に忠実であり、原典の内容を変更することがほとんどない。このため、この作品を研究することで、翻訳者独自の政治思想、社会思想、歴史観などを読み解くことがほぼ不可能だと考えられてきた。

しかし、国家プロジェクトと同時期に個人的もしくは極めて小さな規模でボエスの大著を翻訳した *The Mar Lodge Translation* について、誰がどのような目的でこのプロジェクトを推進したのか、また歴史書の翻訳作品にどのような有用性を見出していたのかを明らかにすることはベレンデンの作品とは異なった角度から自国語文化形成の様相を明らかにするうえで極めて意義深い。このような理由から *The Mar Lodge Translation* の全体像を明らかにするべく、様々な角度からこの作品を研究するに至った。

2. 研究の目的

上述のように、*The Mar Lodge Translation* については学術的な研究がほとんどなされてこなかった。そのため、この作品の成立過程、またその受容について解明し、この作品が16世紀スコットランドの文化においてどのような位置を占めていたのかを明らかにすることが目的である。また、この翻訳者の社会的立場はベレンデンとのそれとは一致しない。原典作品そのものの内容とそこから浮かび上がる翻訳者の翻訳方法、政治思想、社会的立場などを解明し、それをベレンデンのものと比較することで、当時のスコットランドにおける自国語文化の様相を多面的に理解する一歩となることを目指す。

3. 研究の方法

The Mar Lodge Translation の成立過程を明らかにするために、現存する写本に使用された紙のウォーターマークを調べた。また、どのような経緯でこの作品が作成されたのかを明らかにするために、写本の書き込みにある名前を調査・特定し、16世紀当時の読者層を特定していった。翻訳者の思想や翻訳方法などを明らかにするために、ボエスの原典、ベレンデンの翻訳と比較・考察を行った。特に、スコットランド国民の国家意識形成に極めて重要な国家の起源を叙述している Book 1、スコットランドにおける政治、王権の在り方に大きな変化が生じた Book 12、Book 13、そして16世紀スコットランドの社会と直接的な結びつきが強い Book 16 を中心に、原典がどのように翻訳されているのかを詳細に考察し、さらにベレンデンの翻訳との関係も考察した。

4. 研究成果

写本のウォーター・マークの調査からは、この翻訳が作成されたのが、国家的プロジェクトであるジョン・ベレンデンの翻訳とほぼ同時期であったこと(1531年)が判明した。また、写本の書き込みの調査からは、この写本が16世紀にスコットランドのファイフ周辺の裕福な市民や商人の間で流通していたことなどがわかった。ファイフは、当時書物の流通が盛んであった地域であり、ベレンデンの写本や印刷本もファイフで多く流通していたことがわかっている。さらに、*The Mar Lodge Translation* の所有者の中にはジョン・ベレンデンと近い間柄にあった可能性が高い人物もいるなど、当時の書物流通と書物生産が密接に関連しあっていた様子がわかった。

本文の考察からは、この翻訳者が強調したい部分にはほぼ同義の単語2語を組み合わせることで、また、自らのこだわりがある部分には特定のキーワードを多用する傾向があることもわかった。例えば、王権に関する記述には'justice and equity'、'good point and rest'などといった組み合わせが頻繁に使用されている。ここからこの翻訳者が国王の責務として国民に等しく道義的な行いをすることを強調していることがわかる。これは、国王は地方の豪族を鎮圧して国家を統一するべきだという帝国主義的な思想とも繋がる。*The Mar Lodge Translator* はベレンデンのように'empire'という単語を意図的に使用してはいないものの、ベレンデンが国王による国内統一の描写に頻繁に使用した'daunting'という単語は何度も使用しており、そこには帝国主義的イデオロギーを読み取るのが可能である。つまり、この翻訳者は、対外的な emperor としての国王の存在を強調したベレンデンとは対照的に、国内における emperor としての国王の存在をより重視していると考えられるのである。

また、この作品を原典と詳細に比較・考察することで、翻訳者が自ら原典に変更を加えた箇

所が見つかった。これはベレンデンにはない変更であり、The Mar Lodge Translator 自身のこだわりや主張が反映されていると考えて間違いないであろう。例えば、特定の教区の司祭について記述を増やしていることから、翻訳者とその教区の関係が深いことが予想される。この情報はこの作品の制作過程のさらなる解明に貢献するであろう。さらに、翻訳者は王権に関する歴史記述にも意図的に変更を加えている。例えば、国王の横暴に苦しんでいた国民の多くが疫病で死んだという歴史が国民に被害をもたらした国王一人が疫病で死を迎えた、という因果応報を示す歴史に変えられている。これは、上述の翻訳者の王権への考えと併せて考えれば、翻訳者が自身の政治観に基づき、国内静定という責務を果たさない国王が受けるべき当然の報いを歴史叙述に反映したことはほぼ疑いがない。この点において、The Mar Lodge Translator はベレンデンよりもボエスに近いといえるかもしれない。というのも、前者は、本心ではどうであれ、resistance theory (国民には暴君を廃位させる権利があるとする考え)を翻訳の中で表立って強調することはなかったが、ボエスは多くの暴君が廃位される様子を叙述することで、国王への教訓としていたことが知られているからである。当時はこのように直接言葉で主張をするのではなく、歴史の展開を通して読者に「教訓」を与えることが多くあり、ボエスにはそのような例が散見される。しかし、国王に著作を献呈したボエスとは異なり、個人的に翻訳を製作した The Mar Lodge Translator が自らの翻訳作品を Mirror for Princes の系譜に連なるものとして位置付けていた可能性があることは極めて興味深い点である。

このように、自国語文化の黎明期において、個人で歴史書の翻訳に取り組んだ The Mar Lodge Translator は、程度の差や内容の違いはあれども、国家的プロジェクトの担い手であるジョン・ベレンデンと同様に、ヒューマニズム的な思想に影響を受け、自らの王権への考えや政治思想などを主張するための媒体として歴史叙述を利用していたことがわかった。これは、16世紀スコットランドにおける自国語文化形成の基盤となった文人たちの活動の中に、歴史叙述の社会的、政治的機能に対する共通の信念、信仰が存在したことを裏付けると考えられる。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 2 件)

1. 張替涼子 「The Mar Lodge Translator による『スコットランド国民の歴史』Book 1 の翻訳について」『東京理科大学紀要(教養篇)』51(2019), 41-57 査読有
2. 張替涼子 「16世紀スコットランドにおける帝国主義の王権——『スコットランド国民の歴史』の翻訳における daunting の意味を探る」『東京理科大学紀要(教養篇)』49(2017), 1-13 頁 査読有

〔学会発表〕(計 1 件)

1. Ryoko Harikae, 'The Mar Lodge Translation and Its Translator: A New Aspect of Vernacular Literature in Early Sixteenth-Century Scotland,' 15th International Conference on Medieval and Renaissance Scottish Literature and Language (University of Glasgow, July 28 2017)

〔図書〕(計 1 件)

1. Ryoko Harikae, "'Daunting' the Isles, Borders, and Highlands: Imperial Kingship in John Bellenden's Chronicles of Scotland and the Mar Lodge Translation', in Premodern Scotland: Literature and Governance, 1420-1587 (Oxford: Oxford University Press, 2017), pp. 159-70 (p. 246)

〔産業財産権〕

○出願状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年：
国内外の別：

○取得状況(計 件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年：

国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等

6．研究組織

(1)研究分担者

研究分担者氏名：

ローマ字氏名：

所属研究機関名：

部局名：

職名：

研究者番号（8桁）：

(2)研究協力者

研究協力者氏名：

ローマ字氏名：

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。